「よさこい」という学びのかたち

函館市医師会
函館市医師会健診検査センター　水関（みずせき）　清（きよし）

高知の「よさこい祭り」では、８月９日の前夜祭から12日の後夜祭にかけて、市内９か所の競演場・７か所の演舞場で約200チーム、約18,000人の踊り子が、鳴子を手に持って鳴らしながら、工夫を凝らした踊りを繰り広げる。もともとは戦後復興・商店街の活性化のために、高知市で1954年８月に始められた祭りであるが、その際に決められたのは、両手に鳴子という簡単な木製楽器を持ち、テーマソングに合わせて皆が同じ振り付け（日本舞踊５流派のお師匠さんたちと一緒に「正調」の「鳴子踊り」が考えられた）で踊りながら商店街をパレードすることと、観光客の来県も想定して、徳島の阿波踊りとは微妙にずらした日程のふたつであった。

テーマソングは、高知県民謡『よさこい節』と、この民謡をもとに愛媛県出身の作曲家・武政英策(1907-1982）が祭りのために書き下ろした『よさこい鳴子踊り』である。もともとの『よさこい節』には、はりまや橋・御畳瀬（みませ)・浦戸・桂浜といった県内の名所のほかに、気宇壮大な高知人気質が織り込まれている

♪言うたちいかんちや　おらんくの池にゃ／潮吹く魚が　泳ぎよる／よさこい　よさこい

「よさこい」の意味・語源・由来には諸説あるが、「夜に来い（夜さ来い)」、「よってらっしゃい」が、代表的なものである。「おらんくの池」とは、「太平洋に面した、われらがお国である高知の海」、「潮吹く魚」とは、言うまでもなくクジラのことである。

一方、新作（といっても71年前であるが）の『よさこい鳴子踊り』には、以下に示すように、リズミカルな踊りの姿が歌い込まれている。

♪ヨッチョレヨ　ヨッチョレヨ　高知の城下へ来てみいや／じんまも　ばんばも　よう踊る／鳴子両手に　よう踊る　よう踊る

「ヨッチョレヨ」とは、（よさこい踊りの集団が道の真ん中を通るから)「道を開けてくれ」、「じんま」と「ばんば」は、それぞれ「おじいさん」・「おばあさん」の意味。

「よさこい祭り」では、さまざまにアレンジされた上記の楽曲に合わせて鳴子を振りつつ各チームが、趣向を凝らした振り付けや衣装を披露しながら踊り歩くのである。このような「よさこい祭り」が定着した一方で、「いごっそう」や「はちきん」と呼ばれる土佐人の気質からか、「正調」で踊ることを良しとしない踊り子による、好き勝手な踊りも続出した。そしてついには、楽曲にテーマソングの一部が含まれ、鳴子を持てばOKという自由な創作ダンスも「よさこい」と呼ばれるようになったのである。

約40年間、高知ローカルの踊りであった「よさこい」が各地で踊られ、鳴子踊りの競演が展開するきっかけとなったのは、1992年にこれを見た北海道大学の学生が、札幌で始めた「YOSAKOIソーラン祭り」である。その後これを参考にして、埼玉県朝霞・宮城県仙台・愛知県名古屋などでも鳴子踊りのイベントが始まった。

これほどまでに各地で受け入れられた理由について、考えてみたい。

まず、「楽曲にテーマソングの一部が含まれ、鳴子を持てばOK」という自由さが保証する、創作ダンスの愉しさが挙げられる。そして、毎年のように踊りが変わることは、チームの全員が「一から新しく創作したダンス」を習得することにつながり、メンバー構成自体も流動的となり、新メンバーであっても実力次第でチームの中心で踊ることができることにもなる。さらに、その年々の各チームの振付・衣装・音楽などを見比べて、踊り子がチームを主体的に選びとるために、商店街の名前を冠するチームや企業名が付いたチームにも、しばしばそれらと無関係なメンバーが集まる結果、ゆるやかな拘束のもとで、メンバー相互は親密になるものの、その細かな属性についてはよく知らないという、ある意味で現代的な人的ネットワークが築かれる。

「一から新しく創作したダンス」を案出するために活用されてきたのが、「豊かな地域色」である。

「YOSAKOIソーラン祭り」の楽曲の一部にソーラン節の節回しが含まれているように、地域の特色を想起させるメロディーや振り付けを取り入れた踊りを考案するためには、地域の民謡が根差す歴史や特色ある文化を学んで取り入れる工夫が必要となる。さらに、その学習結果を参加者間で交換・共有することは、相互の交流の質的な充実を促すことになり、地域のアイデンティティを共有することを通した地域貢献にもつながる。すなわち、「地域の豊かさ」の基盤となる地域固有の歴史や文化を学習するという「自発的な学び」の先に「オリジナルな踊り」を発想するということは、「自らや、場合によっては他者の力をも糾合することで考案した」という喜びにも直結するのである。

「よさこい」とは、高知や札幌などの「街を舞台」にした、「楽曲にテーマソングの一部が含まれ、鳴子を持てばOK」という簡素な約束事さえ守れば、その自由さが保証される創作ダンスである。約束事の簡素さは、「緩やかなネットワーク」と「参加者の流動性」を生み出し、自由な創作の多彩さを維持するために「豊かな地域色」が活用される。そして、それらが統合される過程には、「自発的に学ぶ喜び」が内包される。

「よさこい」が大人数のグループで、大音響の音楽に合わせて広場や通りで催される場合には、創作ダンスは「手軽な自己表現の場」としても機能する。ある意味で「よさこい」の人的なネットワークは、現代社会そのものなのである。